
魔法少女リリカルなのはShort Song Stories

月兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはShort Song Stories

【Nコード】

N25760

【作者名】

月兎

【あらすじ】

どうも、月兎です。

『魔法少女リリカルなのはSSS（略）』は短編集です。

ほのぼのとした、あるいはちょっとシリアスな日常編が基本なので、熱血バトルが好きな方には物足りないかもしれません。

詳しくは『はじめに』を読んでください。

では、どうして、

はじめに

どうも、月兎です。

『魔法少女リリカルなのはSSSS（略）』へようこそ。以下、ちよつとした注意点です。

*この小説はリリカルなのはシリーズを下敷きにした短編集です。基本は一話読み切り型で、時系列等もバラバラで無印からstersまで取り扱う予定です。基本的には各話は独立しています。が、連作なんかもできたら盛り込みたいとな、と考えています。なので、ちよつとした繋がりがある、かもしれません。

*この短編集のコンセプトは『音楽ありきの小説』です。要するに、イメージソング有りを前提に小説を書こう！ということ。執筆しています。

なので、YouTube等で音楽を聴きながら読んで頂くとより一層楽しんで頂けると思います。各話の題名がそのまま曲名になります。

*更新は不定期。作者の気の向くままにつれづれと進行します。

*誹謗中傷は止めてください。作者の心はガラスよりも脆いので、粉々に砕け散ります。逆に感想を頂けると執筆スピードがアップします。

*作者は理系の人間なので、法律のことはよく知りません。著作権法がどうか固いことは言わないでください。ベースになった曲の歌詞は載せません。

はじめは息抜きにでも…と書き出したんですが思いの外、ハマってしましまして、書きたいストーリーも幾つか浮かんできて…

結果、メインの小説はちょっと置いといて…な感じになってしまいました。楽しみにされている読者の皆さん、申し訳ありません。執筆は続けているので気長にお待ちください。

それでは、『魔法少女リリカルなのはSSSS（略）』をお楽しみください。

『伝えたい言葉』（前書き）

時間軸で言うとStrikersアフターです。

機動六課解散直前のナカジマ父娘を描いたの物語です。

後半、オリキャラがキーになっています。苦手な方はご注意ください。
い。

記念すべき？第一話なのに少々重めのお話ですが、どうぞお楽しみ
ください。

『伝えたい言葉』

・*・*・*・

それは機動六課解散を目前に控えたある日のことでした。

「おお、スバル。珍しいな、お前から連絡してくるなんて。どうかしたのか？」

久しぶりに見た父さんの顔。

真っ白な髪の毛。

しわくちゃの笑顔。

モニター越しでも仕事で疲れているのがわかる。この時期は機動六課だけじゃなくてどこの部隊も忙しい。だから、こんなこと、本当は言っちゃいけないんだけど。困らせちゃうってわかってるんだけど。

「ねえ、父さん…今度の休み、空いてるかな？会いたいんだ」

伝えたい言葉があるんだ。

「ああ…わかった」

父さんは嫌な顔一つせずに頷いてくれた。

・*・*・*

魔法少女リリカルなのは s t r i k e r s

『伝えたい言葉』 始まります。

約束の日、時間より少し早めに待ち合わせ場所に到着したあたしを迎えてくれたのは、やっぱり父さんのしわくちゃな笑顔だった。

「ごめん、遅れた」

「俺が早く着いただけだ、気にすんな。それにしても珍しいな、スバルがそんな服を着るなんて」

父さんの意外そうな顔にあたしは嬉しそうに微笑む。今日のあたしはいつもなら絶対に着ない大人っぽいデザインの黒いワンピースにヒールが高めのブーツ。髪もティアナに結ってもらって見栄えのするちよつと高そうな髪留めで留めてる。うっすらとではあるが化粧までしているのだから、父さんが驚くのも無理もない。家にいた頃のあたしは化粧の真似事さえしたことがなかったのだから。こうしているとは胸元を飾る相棒がちよつとした宝石に見えてしまう。

「その…母さんのお墓参りに行きたかったから」

半分は真実で、半分は嘘だった。

お墓参りに行くから黒を選んだのは本当のことだけど、この服を選んだのは、本当はちよつと背伸びがしたかったからだ。父さんに釣り合う格好がしかなかった。子供っぽい服で父さんの隣に立ちたくなかった。

「なんだ？墓参りって言うてくれたらギンガも呼んだのによ」

もったいない、と呟く父さんにあたしは拗ねたように言った。

「父さんと二人きりで行きたかったの」

「おお、そうかい、そうかい」

父さんの手があたしの頭を撫でる。大きくて、ゴツゴツした優しい手。こんな風にされるのは懐かしくて、恥ずかしくて、照れくさくて、そして、すごく嬉しかった。

途中でお墓に供える花束を買い、二人で母さんの眠る場所まで続く坂道を登る。綺麗に刈り取られた芝生。よく整備された白い石の階段。子供の頃はあんなに長く、遠く感じた階段が今では軽いジョギングコースのように思えてしまう。

「そっぴや昔はお前やギンガを背負って上ったな」

どうやらお互いに同じことを考えていたらしい。昔を懐かしむ父さんの言葉に私も笑った。

「疲れたとかもう歩けないって駄々こねられて…もうおんぶしてくれって言われてもできねえな」

「い、言わないよ、そんなこと…」

そりゃ、そうだ、と笑う父さんの顔は少し寂しそうに見えた。母さんの死の真相を知ってから父さんはめっきり老け込んでしまった。それは到底納得できる理由ではなかったが、父さんは何も言わず、黙ってそれを受け入れた。それでよかったのかあたしにもギン姉にも分からなかった。だけど、父さんがそう決めたのなら、娘のあたし達があれこれ口を出すべきじゃない。父さんが黙ってそるを受け入れたのなら、あたし達も受け入れるしかない。それだけはあたしにも分かった。

「ところでよ、スバル…墓参りだけに来たわけじゃねえんだろ？何かあったのか？それとも相談ごとか？」

父さんの言葉に私の足が止まる。

「…気付いてたんだね」

「何年、父娘やってると思ってんだ。そんな顔して、おめえの考えることぐれえ、想像つく」

父さんの言葉にあたしは言葉を続けられなくなった。頭の上にゴツゴツした感触。父さんの手だった。

「ギンガから聞いたぜ？おめえ、特別救助隊からスカウトされたらしいな」

父さんの言葉にあたしは頷く。全部お見通しだったんだ、という悔しさと安心感。心の中がかき乱されいく。

「おめえの夢だったんだろ？迷うことなんかねえだろ。それともあれか？ティアナの嬢ちゃんとは別れるのが嫌だったのか？」

あたしは黙ったまま首を横に振った。ティアと別れることが寂しくないと言えば嘘になる。だけど、執務官志望のティアと救助隊志望のあたしとは進むべき道が違う。だから、いつかは別れなければならないと覚悟はしていたし、そんなことを父さんに相談してもどうしようもない。

「母さんの前で全部、話すから」

あたしがそう言うのと、父さんはそれ以上何も聞かなかった。わかった、と頷くと何事もなかったかのように歩き始め、あたしも黙ってそれに続く。母さんの墓に着くまであたしと父さんは一度も口を利かなかった。

「久しぶりだね、母さん。えーと……ティアと一緒に来て以来だから半年ぶり、くらいかな。あたしもギン姉も、もちろん父さんもみんな元気です」

あたしは母さんのお墓の前に花束を備えてで手を合わす。父さんも黙って手を合わしている。いつも大きく見える父さんが、この時だけはすごく小さく見えた。

「さて、それじゃ、スバル、その話とやらを聞かせもらおうか？」

「うん…ねえ、父さんはあたしが特別救助隊にスカウトされたって聞いた時、どう思った？」

いきなりの質問。父さんは少しだけ驚いた顔をし、一寸悩む素振りを見せてからあたしに言った。

「救助隊がおめえの夢だったんだろ？親として嬉しいし、これでも喜んでるぞ？」

そういつて豪快に笑う父さんはどこか寂しそうで、無理してるみたいだった。そんな父さんを見てるのが苦しかった。

「ねえ…父さん、無理しないで」

「無理？俺あ無理なんて…」

「無理してる！！それくらいわかるよ。父さんの娘だよ。それくらい…あたしにもわかるよ」

気が付いたら叫んでいた。

無理をしている父さんを見るのが苦しくて、隠そうとされたことが悔しくて、そしてなにより、無理をさせているあたし自身が情けなくて。涙が頬を伝うのを拭いもせず、あたしは言葉を続けた。

「知ってるんだよ。あたしやギン姉が管理局に入るのに本当は反対してたこと。ギン姉が捕まって、私も大怪我して父さんに心配かけた。もしあたしがレスキューに入ったら、父さんにもっと心配かける。レスキューは夢だった。だけど、父さんに心配かけてまで…あ

たし、そんなの嫌だ」

あたしは父さんに抱きついた。不思議と恥ずかしさも躊躇いも感じなかった。父さんは一瞬驚いたみたいだったけど、すぐにゴツゴツした大きな手であたしの頭を優しく撫でてくれた。

「悩みつてのはそれだけか？」

抱きついたままあたしは頷いた。特別救助隊からスカウトされたと聞いた時はすごく嬉しかった。でも、同じくらい怖かった。災害救助はいつも危険と隣り合わせだ。いつあたしにそれがあたしに降りかかってくるか分からない。それが怖かった。

もし、あたしが事故に巻き込まれたら、あたしが怪我をしたら、あたしが死んでしまったら、父さんはどんな顔をするだろう。

思い浮かんだのは病院で見た父さんの顔だった。

悲しみを押し殺して、あたしを不安にさせないように無理に笑って、元気づけようとしてくれた父さんの顔。

想像したくなかった。だけど、思い浮かんでしまったものは消えてくれない。夢は、叶えたい。だけど、二度とあんな父さんを見たくなかった。

「父さんが悲しむのは、見たくない。だから、父さんが反対するなら私は…」

「スバル、おめえが救助隊にスカウトされたって聞いて心配しねえわけがねえ。けどな、それを理由に救助隊を断るってのは間違いだ」

父さんの声は少し怒っていた。どうして父さんが怒るのか私にはわからなかったけど確かその声は怒っていた。

「おめえが怪我したらもちろん辛れえが、親のせいで子供に夢を諦められた方がもっと辛れえ。子供の夢は親の夢だ。叶えてやりてえんだよ」

子供の夢は親の夢。

そんなこと、今まで一度も考えたことがなかった。
私の夢は私だけの夢だった。でも、今日から違う。
私の夢は私一人の夢じゃなくなってしまう。

「だいたい、おめえに心配されるほど俺あ老け込んだじゃねえぞ」

この夢はあたしが考えていたよりずっと重い。

あたしに背負えるのだろうか。そう考えてあたしは首を横に振る。

いや、違う。背負わないといけないんだ。

あたしの夢はたくさんの人を背負っている。
これからあたしが助けるたくさんの命と未来。
その全てを負う覚悟を持ってないといけないんだ。

「・・・夢、叶えていいんだよね？」

「ああ」

その一言が胸に響く。本心ではきつと、言いたいことがたくさんあるはずだ。例えば訓練校に入りたいと言った時も父さんにはいつぱい迷惑かけた。これまでずっと、そして、きつとこれからも迷惑をかける。でも、それでいいんだ。

「ごめんね、こんなワガママな娘に育っちゃって」

「そんなふうにおめえを育てたのは俺だ。謝ることなんかねえよ」

その一言が胸に響く。本心ではきつと言いたいことがいっぱいあるはずだ。それを全部胸の奥に秘めて、あたしの背中を押してくれた。機動六課で色々あって、ほんの少しは大人になったつもりだったけど、やっぱり子供のままだった。

「あのね…あたしはきつとこれからも父さんに心配かけたり、困らせたりする」

父さんの腕の中であたしは言葉を紡ぐ。悩みを相談したかったのは本当だけど、ここに来た理由は、本当に言いたかったのは別の言葉。

「今までだって、父さんには迷惑をかけてばかりだった。いい娘だったなんて言えない…だけど、あたし、父さんの娘で…」

そこであたしは一旦、言葉を途切らせて顔を上に向ける。見慣れた、頼もしい父さんの顔が滲んで映る。

「父さんがあたしの父さんでよかった。本当によかった…ありがとう、父さん」

あたしはそれ以上父さんを見ていることが出来なかった。頬を伝う涙が焼けるように熱い。胸の奥も、父さんを握っている手のひらも、何もかもが熱い。父さんの腕があたしの体をギュッと抱き締める。

「スバル、夢を叶えろよ」

たったそれだけの言葉なのに、心が熱くなる。言いたいことがいっぱいあるのに言葉が出てこない。

「うん…叶えるよ、絶対に…父さん」

12 years after

「ママあ、つかれたあ」

幼い子供の声が坂道に響く。年は五歳と言った具合だ。大人にとっ

てはなだらかな傾斜に見えるこの坂道も、幼い子供にとっては急斜面に見えてしまうのだろう。

「ホクト、だらしないぞ。ママがホクトくらいの頃は…」

そこまで言っただけの子供の母親は言葉を止めた。すらりと伸びたパンツスーツが凛々しく映える。風になびく空色の髪はあの頃より伸び、邪魔にならないように結い上げられている。スバルは懐かしそうに口元を笑わせ、そして、黙ってホクトの前まで歩いていくと、背中を向けて屈み込んだ。

「ホクト、ママがおんぶしてあげるから乗りな？」

優しい母の言葉にホクトの表情が笑顔に変わる。元気よく頷き、母親の言葉に素直に従う。レスキューの現場で鍛えたスバルの足腰は子供一人を背負ったくらいではビクともしない。

「おもくない？」

ホクトが心配そうに尋ねる。しかし、スバルは笑顔でそれに答える。

「心配しなくても大丈夫だよ。ホクトは軽いよ。軽いけど、でも、とっても重い」

「ホクト、おもしろい？」

「違うよ。ホクトはママにとってすごく大切だったこと」

スバルは笑う。特別救助隊に入隊してもう十年以上が経った。入隊してすぐから災害救助の頭角を見せ始め、シルバーのエースと呼ば

れるまでに時間はかからなかった。数え切れないくらいの命を助け、同じくらいたくさんの方に死に接してきた。良人に出逢い、結婚し、子供まで授かった。

「ママもね、ホクトぐらいの頃は、ううん、ホクトより大きかったな。ママの父さんにおんぶしてもらってここを登ったんだ」

「ゲンじい？」

「そう、ホクトのおじいちゃん」

親は強い。その言葉の意味をスバルは子供を持って改めて実感した。背中の上で無邪気に笑うホクトはスバルにとって宝物だ。ホクトの為なら、どんなに仕事で疲れていても笑顔になれた。頑張れた。踏みとどまれた。

「よし、着いたよ、ホクト」

目的の場所に着いたスバルは背中からホクトを下ろす。

「久しぶりだね、母さん」

「クイ…ント、ナカジ…マ？」

墓石に刻まれた名前をホクトが読む。

「そうだよ。私の母さん、ホクトのおばあちゃん。もう二十年以上前に亡くなっちゃったんだけどね」

二十年、という時間が想像できないのかホクトは首を傾げたままだ。

「二十年…もし、母さんが生きてたらもうおばあちゃんになったんだよ。信じられる?」

遠くを見つめ、スバルが微笑む。

「今更かもしれないけど、母さんって本当にすごい人だったんだね。捜査官として事件の最前線に立つて、母として私とギン姉を育てて、妻として父さんを支えて…本当にすごい。今の私じゃ、全然適わないや」

雲一つない晴れ渡った空を見上げて、スバルは更に言葉を続けた。

「だけど、いつか絶対に追いついてみせるから。今はそれが私の夢。母さんみたいに優しく、強い人になるから、きっと。だから、それまで、見守っていてね」

スバルはそういうとゆっくりと瞼を閉じ、大きく息を吸い込んだ。

「母あさあん、ありがとおおお」

静かな霊園にスバルの大声が響く。あまりの音量にホクトもびっくりして耳を押さえている。もう若さを言い訳にできる年ではないが二人の他に人影もないのだから、少しくらいはいいだろう、と心の中で言い訳をする。

「ごめん、ごめん。びっくりした? 帰りに父さんの…ゲンじいの家に寄ろうか」

「うん」

ホクトはそう頷くと来た道を戻り始めた。てつきり帰りも背負って帰ることになるだろうと思っていたスバルは少し驚いた表情でホクトに尋ねた。

「ホクト、おんぶじゃなくていいの？」

スバルの言葉にホクトは元気よく頷く。

「あのね、ホクトもね、ママみたいになりたい。だから、あるく」

たどたどしい言葉だったがホクトははつきりそう言った。ママみたいにになりたい。その言葉の意味を噛み締めながらスバルは微笑んだ。

「…そつか。ホクトはママの娘で、母さんの孫だもんね。それじゃ、ママもホクトに恥ずかしくないママになれるように頑張らないとね。手繋いで一緒に帰ろうか」

スバルが左手を差し出すとホクトは嬉しそうにその手を取った。あどけない笑顔にまだ小さい手。だけど、すぐに大きな手になる。その時になったら、また二人だけでここに来よう。スバルはそう決めた。二人は手を繋いだまま歩き始めた。

「ホクト、またここに来ようね」

伝えたい言葉があるんだ、母として。続く言葉を胸に仕舞って。

『伝えたい言葉』 Fin .

f r o m

奥華子『伝えたい言葉』

『伝えたい言葉』（後書き）

魔法少女リリカルなのはSSSS（略）、如何だったでしょうか？

まずは、原作ファンの方すみません（汗）。悪いのは作者です。ホクトちゃんは悪くありません。ああ、そこの方、石を投げないで…

と、いうわけで初っ端からオリキャラ登場させちゃいました。スバルの愛娘、ホクトちゃんです。年齢設定は五歳。スバル似というよりはクイントさん似、です。

いやあ、原作ブレイクも甚だしいですね…

ス「しかも、相手役についてはまだ手付かずとか…」

だって、子供だけ先にできちゃったんだもん…

ス「えっ！？できちゃった結婚？」

予定では、恋愛結婚です。医療関係者が技術者系を今のところ想定しています。登場するのはしばらく、もといかなり先のことですが。

オリキャラを作るのは正直言って苦手なんです、ホクトちゃんに關してはすんなり生まれました。やっぱり、子供は天からの授かりものなんですね…

以下、ちょっとした解説。

前半はナカジマ父娘のお話です。読んでの通り、悩むスバルをナカジマパパが一喝…喝ってほどもないですが。

なのはシリーズってお父さんキャラが少ないですよ。ナカジマパパ以外には高町パパと中将くらいで…

個人的には好きです、お父さんキャラ。

ナンバーズさえ受け入れてしまうナカジマパパ、すごいです。渋いです。

そんなパパだから、きっとスバルやギンガのことはいつも心配してるんです。だから御髪があんなに…

後半はスバルがママになって親としてこれからどうしていくか、という決意を表現…できたかな？あんまり自信ないです。

でも、前半よりは後半の方が書きやすかったです。これもひとえにホクトちゃんのおかげです。

スバルにとってなのはは憧れであり、目標です。でも、本心ではナカジマママのことを気にしてるんじゃないかな…と思って書いてみました。

魔導師としての技量はなの方が上でしょうが、器というか人間的な面ではクイントの方が絶対に上です。エースオブエースも、まだ十代の女の子ですからママには勝てません。母は強し（笑）

その意味でスバルの目指すべき目標は、なのはではなくクイントなんだと思います。

この話のイメージソングで、題名にもなっている奥華子さんの『伝

えたい言葉』は是非、聞いてください。

聞きながら読むもよし。読んでから聞くもよし。非常にいい曲です。

次回はいつになるか未定が楽しみにしてください。
では、

『うたかた』（前書き）

どうも、お久しぶりです。月兎です。
約1ヶ月ぶりの投稿です。

遅くなってしまった理由は色々ありますがまあ、一番の原因は長さ
ですかね（笑）
一万六千字オーバー… たぶん、一度の投稿としては過去最大の文字
数です。

さて、今作の特徴は…

ズバリ、『エリフエイ』です。

え？なんだって？エリキャロじゃないのかって？はい、エリキャロ
ではありません。間違いなく、エリフエイです。
strickersアフターで十年後が舞台です。では、どうぞ。月
兎の描くエリフエイの物語をご堪能ください

試験的にいろいろ文体を変えてみたり、技巧的にしてみたりしてる
のでご意見やご感想等、よろしく願います。

『うたかた』

・*・*・*・

プロジェクトF

正式名称『プロジェクトF・A・T・E』

記憶転写型クローンを作り出す研究

アルハザード時代においては記憶転写型クローン技術を用いて自身の予備を用意しておくことが権力者の間では常識であったという…

人であつて、人に非ず

私は自然の理を歪め、造られた命

だから、誰からも愛されることはなく

そして、誰かを愛することも許されない

心のどこかでそう思っていた

・*・*・*・

魔法少女リリカルなのはStrikers

『うたかた』が始まります

ヴィヴィオは既に眠り、なのはの家のリビングにはなのはとフェイトの二人だけだった。向かい合うようにソファーに座り、他愛のない言葉を交わす。

「フェイトちゃん、明日だよな？エリオとキャラに会っの」

なのはの言葉にフェイトが頷く。確かめるようにカレンダーを見る。

「うん、2ヶ月ぶりくらいかな？今回は二人と上手く時間が合わせられなくて、いつもより長くなっちゃたな」

機動六課が解散して十年近く経つがフェイトとエリオ、キャラの三人は予定を合わせて、家族としての団欒の時間を作っている。定期的に連絡を取り合い、お互いに近況報告はしているが直接顔を合わせるのは約2ヶ月ぶりだ。明日のことを考えるとフェイトの顔も自然と綻ぶ。

「二人とも成人したから、明日はそのお祝いも兼ねて、お昼はプレゼントを買って、夜はお酒を飲もうかなって考えてるんだ」

「そっか…あの二人も、もうそんな年になったんだね」

感慨深そうになのはが呟く。フェイトほどではないが、なのはも二人とは年に何度かは顔を合わせている。あの頃の面影を残しながらも幼さの抜けた二人を見るたびに嬉しく感じると共に時間を流れを感じざるを得ない。

「ねえ、フェイトちゃん…余計なお世話って思つかもされないけど、一つ聞いてもいい？」

「なのは、どうしたの？そんな真面目な顔で…ちょっと怖いよ」

笑顔のフェイトとは対照的になのはの表情は真面目そのものだった。怒っている、というより不安そうな、そんななのはの視線がフェイトを真っ直ぐに射抜く。

「フェイトちゃん…結婚願望ってある？それとも、ない？」

「い、いきなり変なこと聞かないでよ、なのは」

照れ隠し、というよりも動揺を隠そうとするフェイトの態度になのはの視線が更に強くなる。

「フェイトちゃん、男の人から告白されても全部断ってるでしょ？誰か好きな人がいるわけでもない。リンディさんもああ見えて気にしてるんだよ？執務官の仕事が忙しいのは判るけど、でもだからってどうにもならないわけじゃないでしょ？」

フェイトは口を閉ざし、俯く。悩む素振りさえ絵になるくらいフェイトの容姿は美しく、若々しい。特別若作りをしているつもりはないが、とても三十路を目前に控えた女性には見えない。

「私も仕事が忙しいからまだ結婚してないけど、お互い、仕事が落ち着いたら結婚しようってユーノ君と約束してる。でも、フェイトちゃんからはそういう話、全然聞かなくて…」

本来ならなのはが口を出すべきではないと判っているせいか、その声は次第に力をなくしていく。

女の幸せは結婚、という時代ではなくなった。フェイトにその意志がないのなら、親友といえども、なのはが口を出すべきことではない。ただ、エリオやキャロ、ヴィヴィオに接するフェイトを見てきたなのはの中には、いつかフェイトは結婚して、いい母親になるんだろう、という想いがあつた。

「結婚願望、か…あまり考えたこともなかったな。したくないって言えば嘘になるけど、今は…その時期じゃないと思う」

フェイトはなのはから顔を背けて、そう呟く。なのはからその表情は見えない。

「そう…ごめんね。変なこと聞いて」

「いいよ、気にしなくて」

フェイトが顔をなのはの方へ向ける。いつもと変わらない、しかし、目に見えない憂いを秘めたその眼差し。これ以上は言わないで、そう無言で訴えてくるフェイトの瞳は泣いているようにさえ見えた。

結婚願望に関するフェイトの言葉はおそらくは真実だ。嘘は言っていない。仕事ならともかく、生真面目なフェイトが嘘をついて誤魔化すなんて器用な真似は出来ない。しかし、重要な部分は隠し、曖昧にしているのは間違いない。三つ子の魂百まで、とはよく言った

もので、フェイトと出逢って二十年近く経つが、フェイトの一人で悩みを抱え込もうとする性格は今も昔も変わらない。自分を蔑ろにしている、とまでは言わないがフェイトは自分より他人の幸せを優先しようとする所がある。執務官となつて自身と似た境遇の子を保護しているのもある意味ではそういうことなのだろう。

「フェイトちゃん、無理しなくていいんだよ？私でよければ相談にのるし、一人で悩まないで…」

「ありがとう、でも、大丈夫だから」

フェイトは無理矢理笑顔を浮かべる。なのはの真摯に眼差し。フェイトはそれが嬉しくて、苦しくて、そして、憎かった。なのはに相談すればきつと親身になつてくれる。しかし、それだけだ。今、フェイトの胸を占めている苦しみはなのはにはきつと理解出来ない、そして、おそらく、この世の誰にも理解出来ず、分かち合えない。フェイト一人で苦しむしかないのだ。心優しい親友はそれでも、苦しみを分かち合おうとしてくれる。それが、フェイトを更に苦しめるとも知らずに。

「もう、寝るね？明日は朝から準備しないとイケないし」

そう言つて話を切り上げるとフェイトは寝室へ向かう。引き留めるタイミングを逃したなのはは一人天井を見上げる。

「フェイトちゃん…一人じゃないんだよ。もっと頼ってくれていいのに…」

夜は静かに更けていった。

「『乾杯！』」

三人の声に続いて、グラスのぶつかり合う音が響く。予約していたクラナガンのレストランで三人は遅めの夕食を取っていた。

「二人ともありがとう。二人からのプレゼント、大切にするね」

フェイトの首もとに輝く銀のネックレスはエリオとキャロからフェイトへのプレゼントだ。細い銀の鎖に繋がったモチーフは大小異なる幾つもの輪連なった幾何学的な意匠をしている。一番外側リングには Fate と小さな文字が刻まれている。

「いつもフェイトさんにはお世話になってばかりで…今日もプレゼントを頂いて、だから、今日はエリオ君と二人で相談して何かプレゼントしようって…気にいってもらえたか？」

「うん、ありがとう、エリオ、キャロ。すごく嬉しいよ」

フェイトの顔から笑みが零れる。ほんのりと頬が染まっているのは決してアルコールのせいではない。もう子供ではないのだと告げる二人の眼差しが誇らしく、少し寂しかった。

「もう十年か…」

フェイトの口からため息が零れる。背が伸び、肩幅も広くなったエリオはずっと遅しくなっている。しかし、筋肉質と呼ぶには細身で、スーツ姿がよく映えている。キャロも髪型や雰囲気は十年前とはだいぶ様変わりしていた。背こそあまり伸びていないが、大人びた眼差しと落ち着いた雰囲気は十年前とはまるで別人だ。髪の色に合わせた淡い紫のワンピースも上手く着こなしている。

「お似合いだよ、二人とも。これからはどうするつもりなの？」

「「これから？」」

二人が揃って首を傾げた。

「だから、将来のことだよ。二人で色々決めているんでしょう？」

遠回しにいつ結婚するのか、とフェイトが尋ねる。二人とも既に成人しているので結婚しようと思えばいつでもできる。二人を引き合わせたのは、あくまでも結果であって、特別な意図があったわけではない。しかし、仲睦まじい二人を見ていると、こうなることを見越していたのではないか、と自分自身に聞いてみたくなる。期待の眼差しを向けるフェイトだったが、二人は困惑した表情を浮かべていた。

「あの…フェイトさん、それって結婚とかそういう意味、ですよね？」

念を押すようにエリオが尋ねる。

「まあ、そういう意味になるかな？」

「フェイトさん、私とエリオ君はそういう関係じゃありません。だから、たぶん…そういうことにはならないと思います」

言いづらそうにキャロが口を開く。予想外の言葉に今度はフェイトが首を傾げる。身長差が気になると言えばそうだが、身内の鼻根目を抜きにしても、お似合いの二人だ。いずれはそうなるだろう、

と誰もが思うことだろう。

「あ、その勘違いしないでください。キャラのことが嫌いとか仲が悪いとかそういうわけじゃないんです」

エリオが少々早口で言葉を続ける。

「キャラのことはもちろん好きですよ。ただ、恋愛というか異性に対する好きじゃないんです。家族に対する好きっていうか…その…上手く言えないんですけど…」

「私もエリオ君と同じで、エリオ君への好きは男の子を好きになるとはちよつと違うんです。だから、私達が結婚するなんてことはたぶん、ないです」

二人とも少し恥ずかしそうに頬を染めている。二人の言葉に心のどこかで残念に思っていたフェイトだったが、二人の表情を見て嬉しくなった。

「そっか…二人はもう家族なんだね。よかった」

二人にとってお互いの存在は既にかげのないものになっていた。そう思うと嬉しくて、そして、少し寂しかった。フェイトがいなくても二人は無事にやっていける。精神的にも、物理的にも支えてくれる存在がすぐそばにいるのだ。成人になった二人に保護者はもういない。フェイトが二人のそばにいる理由はもうなくなった。それは二人の成長の証であり、本来なら喜ぶべきことのはずなのに、素直に喜べない。心のどこかに寂しさが突き刺さる。

「二人じゃありません。フェイトさんもです。私達三人で家族です」

よ」

キャラの言葉が胸に響く。

「それとも、保護者じゃなくなったらもう家族じゃなくなるんですか？」

フェイトを見つめるキャラの瞳はあの頃のままだった。優しさを求め、寂しさに埋もれた悲しい瞳。不安そうなキャラの瞳にフェイトは申し訳なさを感じる。

「そんなことないよ。ごめん、私の言い方が悪かった」

フェイトの言葉にキャラは安堵の表情を浮かべる。

「結婚といえばフェイトさんはどうなんですか？」

何気ないエリオの言葉にフェイトの表情が固まる。

「え、えっと…私もないよ。うん、相手もないし」

どうにか答えるが言葉の端々が硬い。何か含みのあるフェイトの言葉に違和感を覚えたキャラが恐る恐る尋ねる。

「あの…もしかして、私達がいたからですか？私達がいたから男の人と付き合えなかったんじゃない？」

「そ、そんなことないよ。二人が悪いんじゃないよ、本当だよ」

必死に否定するフェイトの態度が二人の不安を煽る。ただでさえ執

務官として忙しいフェイトだ。数少ない休日も、今日のように、二人の為に使ってくれている。間接的にはいえ、二人の存在がフェイトの時間を奪っているのだと思うと顔が自然と下を向いてしまう。

「あの…フェイトさん、私達、あの頃みたいにフェイトさんがいないと、何もできない子供じゃないんです。だから、フェイトさんが私達の為に無理することはないんです。こうしてフェイトさんと一緒に過ごす時間はすごく楽しくて、嬉しいです。でも、そのせいでフェイトさんに負担をかけているんだとしたら…辛いです」

キヤロの瞳がフェイトを射抜く。寂しそうな、しかし、確固たる意志の宿った瞳はフェイトの親友を思い出させる。決して大きな声ではない。むしろ、小さなくらいの声なのに不思議なくらいよく響く。

「フェイトさん、お願いです…私達の為に無理しないでください。私達に縛られないでください。自由に生きてください」

キヤロの言葉にフェイトは俯く。何も答えないまま時間だけが静かに流れていく。間もなくして料理が三人の下へ運ばれてきた。テーブルに料理が並べられて、ようやくフェイトは口を開いた。

「食べよう？ここの料理、美味しいって評判なんだよ」

フェイトに促され、二人は料理を口に運ぶ。しかし、とてもではないが料理を楽しめる雰囲気ではない。会話が弾むはずもなく三人とも黙々と食事を進めていく。結局、久しぶりの家族の団欒は後味の悪いまま終わりを告げてしまった。

「自由になってください、か…」

二人と別れ、自宅に戻ったフェイトはワイングラスを片手に寂しそうに呟いた。今でもキャロの言葉がフェイトの頭に響いている。私は二人に縛られていたのだろうか、そう自問自答してすぐに首を横に振る。二人の世話に苦労しなかった、と言えば嘘になる。しかし、苦痛ではなかった。まだ十代半ばで子育てのいろはも分からないフェイトにとってそれはほとんど手探りの連続だった。上手く出来たとは思っていないし、後悔していることはたくさんある。

「もつと甘えていいんだよ…」

もう一方の手で二人からプレゼントされたネックレスを触りながら寂しそうな表情を浮かべる。このプレゼントもキャロの言葉も、言い換えればフェイトからの自立だ。大人になった証であり、それ自体は喜ぶべきことなのだが、素直に喜べない。寂しさを呑み込むようにワインを口に運ぶ。渋めの赤ワインはほんのりと苦い。空になったグラスに再びワインを注ぐ。

「独り酒、か…私にぴったりだ」

自嘲の笑みをフェイトは浮かべる。機動六課が解散し、一人暮らしをするようになってからフェイトの独り酒はほとんど習慣になっていた。この十年、飲まなかった日の方が少なかったのではないか、と思うことさえある。独りでは癒せない痛みや苦しみはアルコールで紛らわさるしかなかった。ワインを一気に飲み干し、また新しく注ごうとした時、チャイムがなる。

「宅配便？こんな時間に？」

煩わしそうに呟く。決して愉しい気分ではないが、独り酒の独特の

寂しさは嫌いではない。それを邪魔されたとなるとやはりいい気持ちではなかった。玄関まで歩く足取りも覚束ない。どうやら思った以上に飲み過ぎてしまったらしい。

「はあい、どなたですか？」

フェイトが扉の開け、自分の目を疑った。ほろ酔い気分が一気に覚めた。其処に立っていたのはつい先程別れたばかりのエリオ「モンディアルだった。

「すみません、フェイトさん。どうしても話したいことがあって…」

「すみません、フェイトさん。どうしても話したいことがあって…」

そこまで言ってエリオは言葉を途切らせた。今、エリオの目の前に立っているのは間違いなくフェイトだ。しかし、数時間前のフェイトとはまるで別人だった。寂しそうな、何かに縋りつくような瞳。それでいて何かに怯えている瞳。潤んだ紅い瞳は酔っているからではない。普段の明るさも鋭さも嘘のように消えていた。寛いにいるのとはまた別の、言葉は悪いが、ひどく惨めな姿だった。

「エ、エリオ、どうしたの？こんな時間に来るなんて珍しいね…」

声が震えているのはお酒のせいだけではないだろう。エリオに怯えているような様子は哀れだった。そんなフェイトを目の前にして、エリオの中で何かが弾けた。

「どうして…どうして一人が抱え込むんですかっ！？僕たちには相談できないことなんですか！？頼りになりませんか！？」

こんな遅い時間に、女性の部屋へ押し入ることの非常識を知らないエリオではない。それでもなお、エリオを突き動かしたのは怒りと哀しみだった。

「僕はそんなに頼りになりませんか？僕はフェイトさんを支えられないんですか？フェイトさんが悩んで、苦しんでいるのを黙ってみているしかできないんですか？」

悲痛な叫びだった。大切な人が苦しんでいるのに手を差し伸べることさえ許されないもどかしさ。無力な自分へのやり場のない激情。そして、なによりも自分を頼ってくれないことの哀しみ。その想いの全てがこもった叫びだった。

「だ、大丈夫だよ。私のことは心配しないで。エリオが心配することなんて何もないよ」

それでもなお、笑顔を浮かべるフェイトだったが、声は震え、取り繕うのが精一杯な様子だ。今に泣きだしてしまいたいのを懸命に堪えているその表情は強がっている子供そのものだ。

「僕が心配することなんて何もない？そんな言葉を、そんな泣きそうな顔で言ったって…誰が信じるもんか！？」

エリオの腕が伸び、フェイトの肩にそつと触れる。小刻みに震えるフェイトの体は今にも壊れそうなくらい小さく、か弱い。

「フェイトさんには本当に感謝しているんです。親に捨てられて、荒んでいた僕に新しい居場所をくれた。家族のぬくもりを教えてくれた。大切な人を守る力をくれた」

そう言つてエリオはフェイトを抱き寄せる。フェイトは一瞬驚いた表情を浮かべたが抵抗することなく、エリオに身を任せた。

「僕はまだまだ子供です。分からないこともできないこともまだまだいっぱいある。だけど、もうフェイトさんがいないと何もできない子供じゃない。だから……」

エリオの腕がフェイトの体を強く抱きしめる。あの頃は大きく見えた背中が、今はエリオの腕の中に収まって、震えている。

「そんな苦しそうな、泣きそうな顔を隠さないでください。辛いときは辛いつて、苦しいときは苦しいつて言ってください。泣いていいんです。甘えていいんです……」

「エリオ……ズルいよ。私が泣いたら、二人が不安になるから……ずっと、ずっと我慢してたんだよ。それなのに、そんなこと言われたら私……」

それから先はもう言葉にならなかった。これまで堪えていたものが全部溢れてきた。ぼろぼろと涙を零しながら、フェイトはエリオの胸に顔を押し付けた。そのままフェイトはエリオの胸の中で泣いた。泣き続けた。まるで子供のように声を上げて泣き続けた。エリオはそれを黙って、優しく受け止めた。

嗚咽がようやく収まるとフェイトは恥ずかしそうに顔を上げた。泣きはらした目元はほんのりと紅く染まり、実年齢以上にフェイトを幼く見せる。

「その…ごめんね…エリオに色々心配かけて」

「いえ、僕の方こそ、こんな時間に押し掛けてしまって…」

同じく冷静さを取り戻したエリオは恥ずかしそうに自らの不作法を詫び、フェイトを放した。しかし、フェイトはすぐに離れようとせず、一瞬躊躇いの表情を浮かべた後、首を横に振って、エリオを見つめた。

「聞いて欲しいんだ。私がどうして結婚しなかったか…いいかな？」

エリオはすぐに頷く。断る理由などあるはずかない。フェイトは安心したように微笑むとエリオを部屋の奥へと招き入れた。フェイトととの付き合いは長いが、この部屋に入るのはエリオにとって初めてのことだった。忙しく時間がなかった、というのも理由の一つだが、もう無邪気な子供と呼べる年齢でもなくなったエリオ自身がそれとなく避けていたのだ。

「エリオが来るって知ってたらもうちょっときれいに片付けたんだけど」

フェイトは謙遜したように笑う。しかし、部屋はきれいに整理整頓されており、散らかっている様子はない。というよりも、何も無さ過ぎた。必要最低限の家具だけが並べられていて、生活感がまるで感じられなかった。

「楽にして。赤ワインだけど飲む？」

食器棚からワイングラスを取り出しながらフェイトが尋ねる。そして、エリオが答えるよりも先にグラスにワインを注いでエリオに渡

し、テーブルに置いてあった飲みかけのグラスにもワインを注ぐ。

「乾杯」

グラスのぶつかり合う音が部屋に響く。

「さて…どこから話そうか。エリオには私の昔の話、どこまで話したかな？」

「えーと…リンディさんは義理のお母さんで、親子関係が複雑で、本当のお母さんと仲がよくなかった…虐待されていた、それくらいです。詳しいことは何も」

以前にも何度かキャロと二人で尋ねたことがあったが詳しいことは曖昧にされてしまい、結局聞くことができなかった。エリオの言葉にフェイトは申し訳なさそうな笑顔を浮かべる。

「詳しいことは二人には言わないようしてきたからね。話したら、二人が傷つくんじゃないかって…」

そう言ってフェイトは首を横に振った。

「違うな、話したら二人が私から離れていくんじゃないかって…だから、怖くて話せなかった。正直に言うとね、今も少し怖いんだ」

フェイトの唇が微かに震えるのをエリオは見逃さなかった。しかし、震える唇を固く結び、フェイトは目を瞑り、小さく息を吐いた。それが悲しい独白の始まりだった。

「私はね…母さんの、プレシア母さんの死んだ娘、アリシアのクロ

「インなんだ。でも、私は母さんが望んだアリシアとは似ても似つかぬ存在だった。だから、母さんは私に辛くあたった…愛してはくれなかった」

「…私は違う。」

私は、この世の誰とも違う。

歪んだ命だ。

人の形をした異形の化け物だ。

こんな不気味な命、誰が受け入れてくれるのだ…

「本当の私はもうこの世にいない。私を造った母さんも…私はこの世界の誰とも繋がっていない。繋がっちゃいけない存在なんだ。歪な異形なんだ」

——所詮、造られた命だ。

私は私であって私でさえない。

でも、私は私以外の何者にもなれない
なれるはずかない。

私は異形の存在なのだから——

「愛されることを知らないから、愛することを知らない。だから、

誰も愛せない。愛されても、それに答えられない。それなのに、心のどこかで愛されることを渴望している。矛盾してるよね…」

——矛盾していて当然だ

私の存在そのものが矛盾なのだ
歪んでいるのだ、私は

そんな私が誰かを愛することなどできるはずがない——

「もし、私に子供ができて、その子を愛せない。どう愛せばいいのかわからないからきつとその子にも冷たくあたって、傷つけてしまふ。私がそうだったから…」

——そして、その子も愛されることを知らずに育つ。私のように…
虐待は連鎖する、という。それは紛れもない真実だ。愛されることを知らずに育った人間が誰かを愛することなどできない——

「だから、私は結婚しないんだ。誰も幸せになれないから、相手の人も、子供も…きっと幸せになんかなれない」

——私一人が幸せになるなんて、ただのエゴだ。誰かに押しつけていいはずがない

だから、私は独りなんだ――

そう、私は独りだ。

いままでも、そして、これからも

「フェイトさん…先に謝っておきます。ごめんなさい」

エリオはそう呟くとフェイトの頬を思い切り引つ叩いた。ぴしゃりと、部屋に音が響く。突然のことにフェイトは言葉が出なかった。エリオに叩かれた頬が焼けるように熱い。

「フェイトさんは大馬鹿です。フェイトさんは独りじゃない。僕がいます。キャラも、なのはさんやヴィヴィオ…みんないるじゃないですかっ！？どうしてそんな悲しいことを言うんですか？」

捲し立てるようにエリオは言葉を続ける。

「誰も愛せない？そんなことないっ！！僕やキャラをここまで育ててくれたのはフェイトさんです。親から捨てられて、荒んでいた僕をフェイトさんは見捨てなかった。何度も何度も会いに来てくれて、暴れる僕を抱きしめてくれて、愛してくれた。僕はフェイトさんに

救われたんです。フェイトさんに逢えて、本当によかった…」

しかし、フェイトの表情は沈んだままだった。寂しそうに首を横に振り、泣きそうな声でエリオに言った。

「でも、私は…」

人、じゃない

人の形をした何かだ

世界に一人しかない

「…世界に一人しかない異形だ」

「貴女を異形と呼ぶなら、僕も喜んで異形になる。僕も貴女と同じ…造られた、歪んだ命だ」

エリオははつきりとそう言って、持っていたグラスをテーブルに置く。

「フェイトさんは愛することを知らないんじゃない。愛されることを知らないんじゃない。ただ、気付いていないだけです」

エリオはそつと手を伸ばし、フェイトの頬に手を添えた。叩かれた痛みがすうっと引いていく。エリオの優しさがてのひらを通じて伝わってくる。

「僕はフェイトさんを愛しています。たとえ、フェイトさんが僕を愛していなくても、それでも、僕はフェイトさんを愛しています。だから、そんな悲しいこと言わないでください。誰からも愛されていないなんて、もう二度と言わないでください」

ふいにフェイトはこの部屋が、この空間が世界でただ一点不動のものに感じ、その中心に自分たちがいるような胸おどる、心地好い錯覚に陥った。せわしなく変化し続け、絶えまなくうつろいゆく世界。今、フェイトの目の前にはそれらすべてに匹敵する確かなもの、優しく真摯にフェイトを見つめ続けるエリオの瞳があった。

「…はい」

フェイトの口から笑みが零れた。自分の周りを覆っていた紗の帷が、突然切つて落とされたように、フェイトはついに自分が理解したのを知った。瞳と瞳を見交わすとき人々はみな何を感じていたのか。何をさどっていたのか。

私は本当に馬鹿だね。大馬鹿だ。エリオに言われるまで気付かないなんて…

—そんなこと、ないですよ

いいよ、フオローなんて。だって、本当のことだから。誰かに愛してもらわないと誰も愛せないってそう思い込んでいた。そんなことないのにな。

—はい、フェイトさんにはいっぱい愛されてました。いえ、今も愛されてます

エリオ、そんなこと、真顔で言わないで。すごく恥ずかしいんだから。もう、エリオの意地悪…

―意地悪じゃないです。本当にそう思ってます

エリオはやっぱりずるい。そんなふうにならりと言ってしまうなんて…私がどんな気持ちかわかってる？

―迷惑…でしたか？

そ、そんなことないよ。エリオが私のことを愛してるって言うてくれてすごく嬉しいし私もエリオのことを愛してるよ…って、もう、馬鹿…恥ずかしいことを言わせるな。あつ、でも、嬉しいのは本当だよ。エリオに愛してるって言われて、私はすごく嬉しい…

―フェイトさん、にやけてますよ

わ、笑わないでよ。エリオのせいなんだからね。エリオが変なこと言うから…でも、もっともって言ってほしい

―フェイトさん…甘えん坊なんですネ

だ、だって…

―フェイトさん、そんな顔しないでください。いいですよ、いつぱい甘えて。今までフェイトさんに甘えてばかりでしたけど、これからはいつぱい甘えてください。今まで甘えられなかった分までいっぱい甘えてください

エ、エリオっ!？

―嫌、でしたか？

い、嫌じゃないけど…でも、いきなり過ぎるよ。私にも心の準備が…

―抱きしめただけじゃないですか。フェイトさんも昔はよくしてくれましたよ？

そ、それはそうだけど……

―フェイトさんにいつぱい愛されて、育ててもらいましたから

うう、こんな意地悪な子に育てた覚えはないんだけどな…

―意地悪じゃなくて、愛情の裏返しです

もう、エリオつたら…素直じゃないんだから。それ、照れ隠しなんでしょ？わかってるんだよ

―半分は正解です。でも、もう半分は違います

それってどういうこと…？

―フェイトさんは他人のことには一生懸命になれるのに、自分のことには不用心なんです。今でも―

えっ！？ちよつ、エリオっ??

―僕のこと、弟みたいに…あの頃と同じみたいに思ってるんですか？

ひゃっ！？んっ…んんっ！！

―すみません。でも、僕だって好きな人とこうして一緒にいて何も

思わないわけがないじゃないですか

はああ、はああ…エリオ…

―僕の“好き”はこういう好きです。フェイトさんの“好き”とは違うんです

いきなりあんな乱暴なキスするなんて…ズルいよ。それに、エリオは2つ勘違いしてるよ

―2つ？

そう、2つ。まずは一つ目は

―えっ、ちよっ、フェイんっ!？

んっ、はああ…同じだよ。私の“好き”とエリオの“好き”は違うんだよ。同じ“好き”なんだよ。わかった？

―は、はい…

2つ目は、キスってこんな乱暴にするものじゃないんだよ。本当のキスはね、もっと幸せで、嬉しくさせるものなんだよ。こんな風に…

…どうしてだろう

空気がやさしくて、やわらかくて
そして、すごくあたたかい…

フェイトさんが僕のこと
とても好きでいてくれるって

愛してくれているって

自然に伝わってくる…

理屈じゃなくて…言葉じゃなくて…

…その思いが

「フェイトさんのきもち、伝わってきました。すごく嬉しいです」

ほんのりと顔を赤らめ、照れた様子のエリオにフェイトは笑顔で応える。しかし、その顔はエリオよりもずっと紅い。

「そうだったら私も嬉しいな。で、でも、あんまり自信ないっていうか、男の人にこんなことするの初めてだったから…その…下手じゃ、なかった？」

恥ずかしがるような、不安そうな表情を浮かべてフェイトがエリオを見つめる。小動物のような潤んだ瞳にエリオは息を呑むしかない。

「そんなこと、ないですよ」

エリオのその言葉にフェイトの口から安堵のため息が零れる。大胆な言動とは裏腹に随分と緊張していたらしい。その反動なのか、フェイトの口から欠伸が漏れる。

「なんだろう、安心したらすごく疲れちゃった…急に眠気が…」

「ワインの飲み過ぎですよ。僕が来る前から飲んでいたんでしょう」

エリオの言葉にフェイトはまぶたを擦りながら小さく頷く。独り酒に加えて、エリオとキャロの食事でも飲んでいる。普段のフェイトの基準で考えると今日は明らかに飲み過ぎていた。

「もう僕は帰るんで、フェイトさんもすぐに寝てください」

「もう、帰っちゃうの？」

せつなげなフェイトの声がエリオの心を引き留める。しかし、エリオはそれを振り払ってフェイトを見つめる。

「…はい。もう夜も遅いですから」

あの頃のような子供ではないのだ。この以上はエリオの理性が持たない。

「やだ。一緒にいて？」

甘える声でフェイトがエリオの服の裾を掴む。酔っているとは思えないくらい、しっかりとエリオを掴み、フェイトは泣きそうな声で囁く。

「私にいつぱい甘えていいっていったのはエリオだよ。だから…」

「ダメです。甘えてください、とは言いましたが、でもダメです」

「やだ…今日だって2ヶ月ぶりに会えたんだよ。今度はいつ会えるかわからない。そんなの嫌だ。私を独りにしないで。独りは寂しいんだ」

泣かないように精一杯の強がりを見せるフェイトの瞳。縋りつくその瞳は抗い難い甘い誘惑だ。しかし、エリオはそれをも振り払って、フェイトの両肩に手を乗せた。

「大丈夫です、すぐに会えますよ」

「そんな嘘はいらないよ…いらないっ！！いらないっ！！いらないっ！！」

駄々をこねる幼子のようにフェイトは首を横に振る。揺れる髪がエリオの鼻腔をくすぐる。堪えていた涙がフェイトの頬を流れ落ちていく。エリオが決して顔かないのだと知っているのだ。だからこそ、引き留めたかった。どんなに大人気なくても、どんなに情けなくとも、エリオを引き留めたかったのだ。しかし、エリオはつきりと残酷に、首を横に振った。

「嘘なんかじゃありません。だから、そんな顔しないでください。折角の美人が台無しです」

フェイトを落ち着かせる為に、ゆっくりとした言葉遣いでエリオが話す。しかし、フェイトは嫌だと言わんばかりに首を横に振る。

「エリオが泣かせたんだ。女の子を泣かせるエリオなんて嫌いだ」

嫌いだ、というフェイトの言葉にエリオの顔が一瞬歪む。しかし、すぐに笑顔を浮かべてフェイトをじっと見つめる。

「フェイトさん、僕の目を見てください」

決して強い言葉ではない。むしろ、拙く、弱々しささえ感じる。それなのに抗うことができなかった。フェイトはエリオに言われるまま顔を前に向ける。

「今日、僕がここに来た目的はこれを伝える為なんですけど、実は

春からミッドチルダに配属されることが決まりました」

「えっ？」

エリオの言葉の意味が一瞬理解できなかったフェイトの表情が固まる。

「だから、早く一週間…遅くても十日で僕はミッドチルダに来ます。だから、それまで待っていてください」

「…本当に？」

あどけないと形容するしかないフェイトの表情と声。今までにないほどエリオはフェイトを愛しいと思った。そのまま抱きしめ、押し倒してしまいたい衝動を必死で抑え、エリオは頷いた。

「だから、すぐに会えますよ。もう、寂しい思いはさせません。それですね…」

そこでエリオは一旦言葉を途切れさせ、呼吸を置いてからフェイトに言った。

「春から一緒に暮らしませんか？」

フェイトは大きく目を見開き、口を手で押さえ込んでいる。言いたい言葉が幾つもあるのに出てこない。想いが声にならず、涙となって溢れ、頬を伝う。

「嫌…でしたか」

落胆したエリオの声が胸に痛い。違う、そんなことない。そう叫びたいのに声が出てこない。必死で首を横に振って意志を伝える。

「ズルいよ……」

絞り出すようにして出てきたのはそんな言葉だった。胸の奥が焼けるように熱い。涙が止まらない。今更泣き顔を見られてもどうというでもないはずなのに、今だけはどうしてもエリオに見られなくなかった。涙を隠すようにフェイトはエリオの胸に飛び込んだ。

「そんなさりとってしまえるなんてズルい。また、私を泣かせて……ひどいよ。そんなこと言われたら、私……」

あの頃の二人にはもう戻れないということは互いに理解していた。だからこそ、フェイトはすぐに返事ができなかった。一緒に暮らしませんか、その言葉に込められた意味がわからないほど若くないし、愚かでもない。エリオの言葉はプロポーズだ。嬉しい。それは紛れもないフェイトの本心だ。一にも二にも頷いてしまいたい。しかし、言葉が声にならない。

「今までフェイトさんに甘えてばかりで、困らせてばかりで……だから、今度は僕の番です。頼りないかもしれませんが、僕じゃいけませんか？」

「……そんなことないよ。私の方こそ……本当にこんな私なんかでいいの？」

嗚咽のまじった声でフェイトが尋ねる。

「なんかだなんて自分を卑下しないでください。フェイトさんはこれまでたくさんの人を救って、幸せにしてくれました。もっと自身に誇りを持つてください。傲慢していいんです。生まれ方が少し人と違っていただけじゃないですか。幸せになってください。今度はフェイトさんが幸せになってください」

「今日のエリオは本当に意地悪だ。ずっと私を泣かせてばかりで…女を泣かせる人は嫌いだって言ったのに、それなのに…」

顔を上げ、涙で濡れた瞳でフェイトはエリオを見つめた。泣いているはずなのに、人を射抜く強い意志と輝きを宿したその瞳にエリオは息を呑む。

「エリオ、一つだけ聞かせて。エリオは私が幸せになったらそれでいいの？」

「フェイトさんには幸せになってほしいです。でも、それは僕の幸せを犠牲にするわけじゃない。フェイトさんが幸せになってくれないと、僕も幸せになれないんです」

「そっか…よかった」

エリオの言葉にフェイトの顔が綻ぶ。

「私もね、エリオが私の為に無理してるのは嫌だから。エリオが幸せじゃないと私も幸せになれないんだよ。そのこと、忘れないでね」

「はい。幸せになりました、フェイトさん」

エリオが頷くとフェイトも慎ましやかに頭を下げる。

「はい、よろしくお願いします、エリオ」

改まったフェイトの態度にエリオは慌てて言葉を改める。

「あ、その…こちらこそ、よろしくお願いします」

「それじゃ、僕はそろそろ。こっちに来る日が決まったらすぐに連絡します」

「うん、楽しみに待ってる」

そう笑顔を浮かべながらもフェイトはエリオから離れようとしない。ねだるような、甘えるような笑みを浮かべて、エリオを見つめている。その瞳が何を欲しているのかを理解したエリオはそれに答えるようにフェイトを強く抱きしめた。

「甘えてくださいとは言いましたけど、ちょっと積極的過ぎじゃ…」

「だって、甘えん坊なんだもん」

フェイトは恥ずかしがる素振りを見せながらも、笑いながらはつきりとそう言った。困った人だ、零すエリオの顔もまんざらではない様子で手を伸ばし、そっとフェイトの涙を拭う。そして、そのまま包み込むように両手を頬に添える。鼻先にかかる吐息は甘く、ひどく熱っぽい。

「あの…見つめられたままだと恥ずかしいんで、目を閉じてもらえませんか？」

「はい…」

エリオの言葉にフェイトは素直に頷き、目を閉じた。その刹那、フェイトの唇に何かが触れ、すぐに離れていった。啄むような一瞬のキスだった。フェイトはゆっくりと目を開き、悪戯っぽく笑う。

「もう、早すぎるよ」

「すみません… いけませんでしたか？」

不安そうな表情のエリオにフェイトは首を横に振って応える。その笑顔が全てを物語っていた。

「そんなことないよ。エリオの気持ちが伝わってきて、すごくよかった」

フェイトはエリオを抱きしめていた腕を解く。本心ではもっと引き留めていたかったがエリオにも都合がある。それに一週間でまた会えるのだ。急ぐことはない。

「それじゃ、また」

フェイトに軽く一礼してエリオは部屋を後にする。

「…うん、またね」

寂しさを押し隠し、フェイトは笑顔でそれを見送った。

｝ 8 days after ｝

「フェイトさん…まだ怒ってますか？」

ミッドチルダ市内の道路を一台の黒いスポーツカーが駆け抜ける。
運転席に座るフェイトはふくれっ面を浮かべたまま乱暴にハンドルを切る。

「うわっ!？」

助手席のエリオはバランスを崩して、ドアに勢いよく頭をぶつける。
ゴツンと鈍い音が車内に響く。痛みにエリオが顔をしかめるが、フェイトは見向きもしないでブレーキを強く踏み込む。

「着いたよ。降りて」

苛立ちを隠さないフェイトにエリオは申し訳なさそうにするしかない。

「エリオに怒ってるわけじゃないんだよ。仕事の引き継ぎはしつかりしないといけないし、はつきり一週間って言ったわけじゃなくて十日くらいになるかもって…だから、一日遅れたくらいで怒ったりしないよ」

口では怒ってないと言いながらも、笑いエリオの前を歩くフェイトの背中のはつきりとその怒りのほどを物語っている。小刻みに震える肩を見ているだけで生きている心地がしない。

「だから、エリオを責めてるわけじゃないし、本当は私のわがままだってこともわかってる。そんなこんなわがままでエリオを困らせたくないんだけど…だけど…」

「フェイトさん、こっちを向いてもらえませんか？」

エリオはフェイトの腕を取り、半ば強引に振り返させる。そして、ほんの一瞬だけ、フェイトの口を塞ぐ。突然のことに怒りを忘れ、呆氣にとられたフェイトに笑いかけながらエリオは言葉を続ける。

「僕を怒る気持ちはわかります。でも、少しだけ我慢してください。そんなふくれっ面だと、お店の人に迷惑ですよ」

フェイトは一瞬何が起きたのか理解出来なかったが、エリオにキスされたのだと理解すると途端に顔を真っ赤に染めて、辺りを見渡す。

「ちょ、ちょっと、いきなりなんてことするの。こんな人がいるのに……」

人通りは多くないが、好奇の視線は否応なしに突き刺さる。何処からか笑い声さえ聞こえてくる。込み上げてくる恥ずかしさに声は小さくなっていく。

「お、怒ってるんだからね」

顔を真っ赤にしながらエリオを睨みつけるが威厳も迫力もない。むしろ、愛らしくさえ感じられる。その顔が一番魅力的だと言おうと思ったが寸前で止めた。

「わかりました。もうしません。だから、機嫌を直してください」

真面目な顔で見つめられ、フェイトは恥ずかしそうに顔を逸らす。

「エリオのこと、許したわけじゃないんだからね」

拗ねたような小さな声。執務官には見えないその仕草を見せてくれることがエリオは嬉しかった。改めて、フェイトを愛しく思った。

「じゃあ、どうしたら僕を許してくれますか？」

エリオに尋ねられ、フェイトは言葉に窮する。遅れた事情は仕方のないことで、それが理解出来ないほど幼くない。それでも、こうやって駄々をこねているのは、結局、エリオに甘えているに過ぎないのだ。

「…馬鹿。エリオの意地悪…わかってるくせに」

「…もう、寂しくさせませんから」

エリオはそう言ってフェイトの右手をそっと握り締める。あんなに小さかったエリオの手が今ががっしりとフェイトの手を包んでいる。繋いだ手を通じて伝わってくる優しさとぬくもり。愛されているんだ、と実感できる至福の一瞬だ。

「フェイトさん、やっと笑ってくれた」

エリオの口から安堵の声が漏れる。

「それじゃ、そろそろ行きましょう？」

「うん、そうだね。エリオ、行こう、指輪を買いに」

春の柔らかな光が二人を祝福するかのように降り注ぐ。優しい風がフェイトの頬をそっと撫でる。ふと、フェイトは空を見上げた。そこには淡く、透き通った空が広がっていた。

一人ではないと気付いたあの日から廻り始めた運命の春

『うたかた』 F i n .

f r o m

奥華子『うたかた』

『うたかた』（後書き）

魔法少女リリカルなのはSSSS（略）、如何だったでしょうか？

月兔風エリフェイでした。

さてさて、月兔の困った性癖に需要のないカブを好む性質があるようです。今回のエリフェイ然り、前回のナカジマ父娘然り。特にエリフェイは鉄板エリキャラがあるせいかほとんど見たことがありません。偶にあっても家族愛的なお話でちょっと物足りなかったり…

というわけで書いてみちゃいました

思ってたより甘いお話になってしまいましたけど。本当は別の曲を使ってもっと悲しい感じにするつもりだったんですが、上手くいきませんでした。ちょっと残念

フェイトの口調がたびたび変わるのはお酒のせいです。作者の技量が低いせいではありません、きっと

ということ以下ちょっと解説、と称した月兔的エリフェイの魅力語り

まずはその関係の曖昧性

姉弟でも、母子でもなくて、赤の他人でもない二人が互いに愛し合っている。今は家族としての愛だけど、それが男女の愛へと発展し

たらって考えるとドキドキしませんか？年の差なんて関係ねえやい！！

次に出生の秘密。

二人ともクローンで、一度は親から捨てられた経験がある。たぶん、その苦しみはクローンでない人間には理解出来ないんじゃないかな。これが原因で誰とも付き合おうとしないっていうのはおかしくないんじゃないかな、と思います。で、同じ傷を持つ者同士が傷を舐め合って…個人的に大好きです

三つ目は年の差

strickers 時でフェイト19歳、エリオ10歳。このままだと犯罪ですが、十年経てば合法です。年上のフェイトがリードしようとするんだけど、主導権はエリオに…な構図がありありと浮かびます

色々挙げましたが、一言で言うならその禁断性というか危うさが好きなんです。

イメージ的には『堕ちていく恋』

お互いにマイナスにしかなくても離れられない、そんな相依存の関係を勝手に妄想してます。今回はハッピーエンドっぽい終わり方になってしまったんでちょっと納得できてない所もあるんで、また機会があればエリフェイを書きたいです。

二人にはとことん堕ちていてもらいますよ（笑）

今回もイメージソングは奥華子です。私の好きな歌手の一人です。
はじめは別の曲の予定だったんですが、こっちの方が合ってるかな
と…

小説だけでなく選曲についても意見や感想を頂けると嬉しいです。

ではでは。また次回をお楽しみに

『迷路』（前書き）

どうも、月兎です。

あと何時間もしないうちに新年ですね。今年も色々ありました。来年もよろしく願いします。

さてさて今回の主役はプレシアママです。（また、マイナーなキャラを・・・

一期のラスボスにして名悪役。稀代のペテン師？のプレシアママですが、本当はフェイトのことを愛していたんじゃないか、という月兎の歪んだ解釈に基づいて作成しました。

一期12話をベースに、回想編を挟みながら仕上げてみました。是非、お楽しみください。

では、どうぞ、

『迷路』

・*・*・*・

ガラス越しに見えるのは私の開発した新型の魔導炉。長年の研究がようやく実を結び、今日、公開実験にこぎつけたのだ。

「アリシア、ここでリニスと一緒に待っててね。母さん、お仕事してくるから」

「うん、待ってる」

そう言っただけで私は娘の手を放した。山猫はアリシアの足下に擦り寄り、甘えた声で鳴く。私は嬉しそうに笑う娘に手を振って応える。あのときのアリシアの笑顔は本当に嬉しそうで、楽しそうだった。

それなのに……

これはあのときの記憶だ。

大切な、かけがえのない大切な私の、たった一人の娘を失ったあの

日の記憶だ。

あれからもう、何年も経ったというのに褪せることのない後悔の記憶だ。

忌まわしく、そして、美しい、私が一番幸せだった頃の記憶だ。

どうしてあのとき、私は手を放してしまったのか。今でも夢に見るほどの後悔して、そして、きっと、また私は後悔する。

あの子を突き放してしまうことを

私は、本当に愚かだ

魔法少女リリカルなのは

『迷路』 始まります

・*・*・*・

「世界は、いつだって……こんなはずじゃないことばかりだよ！
！ずっと昔から、いつだって、誰だってそうなんだ！！」

管理局の執務官が私にデバイスを向けながら叫ぶ。まだ若い、少年

だ。額から流れる血は決して軽い怪我ではないだろう。しかし、それでも、気概に衰えはない。

「こんなはずじゃない現実から逃げるか、それとも立ち向かうかは個人の自由だ！ だけど、自分の勝手な悲しみに、無関係な人間を巻き込んでいい権利は、どこの誰にもありはしない！！」

ある意味ではその通りだ。しかし、若さゆえ、この少年は知らないのだ。

世界と秤にかけてなお、釣り合うことのないかけがえのない者がいることを。

そして、余命幾ばくかの生先短い人間を止める枷などこの世のどこにもないことを。

世界の全てを、私自身さえも、犠牲にしても構わない。そう思える人がいることを。

それでも、守りたいのだ。

二人の未来を、幸せを。

それでも、取り戻したいのだ。

二人の時間を、笑顔を。

その為に生きてきた。もう、それしか、もう残されていないのだ。

・*・*・

私が不治の病に罹っていると気付いたのは事故からかなりの年月が経って、人造生命の研究にようやく目処が立った頃だった。あの頃の私は研究に没頭して、自分自身を顧みることさえしなかった。研究者にはよくあることだが、寝食を愚かにしたのだから、当然の結果だと言ってしまうえばそれだけのことだった。

もう、あまり時間がない。

焦った私は研究を急いだ。

医学は専門ではなかったが、人造生命を研究しているからその方面についてある程度の知識はある。残された時間は決して多くはないのだと、知りたくはなかったが、理解していた。リニスを生み出したのもちょうどこの頃だ。研究も最終段階に入り、あとはあの子が目覚ますのを待つだけだった。

私の理論が正しければ、あと数日中で目を覚ますはずだ。そうしたら、もう一度あの子に、アリシアに会えるのだ。私の胸の中は喜びでいっぱいだった。

そして、遂にあの日が訪れた。

アリシアと、もう一度やり直せる。あの辛い事故を忘れて、幸せを手に入れる。そう思っていた。

だけど、私を待っていたのはあの子の笑顔ではなく、深い絶望と後悔だった。

カプセルの中で目覚めた彼女の瞳を見て、私は言葉を失った。

紅

まるで、血のような

人の目を惹きつける鮮烈な紅

——アリシアは澄み切った蒼い目をしていたはずなのに……

其処にいたのはアリシアとは似ても似つかぬ、全く別の少女だった。私は自分が失敗したのだと悟った。元々、成功する見込みの低い実験ではあったが期待していただけにその苦しみは想像を越えていた。更に私を追い討ちをかけたのはその少女の発した言葉だった。

「かあ…さん？」

感情の抜け落ちた無機質な声。まるで、高性能な電子音のようだった。人間の声に酷似しているが、決して人間の声ではなかった。決定的な何かが欠けているのだ。

——違う、アリシアはこんな声でしゃべったりしなかった。

アリシアでなくとも、こんな声で話すはずがない。人間には絶対に出せない冷たい声音だ。まるで、命のぬくもりが感じられなかった。

「プレシア…」

振り返るとリニスが立っていた。困惑した様子で私と生まれたばかり

りのこの子を見比べ、物言いたげな視線を投げかけてくる。

「…後は任せるわ、リニス」

そういつて私はその子の縋りつくような視線を振り払う。その瞳は異様だった。甘えているのではないのだ。文字通り、縋りつくのだ。まるで、私を咎めるかのように、無言で、どこまでも追ってくるのだ。言葉にならない恐怖と後悔、そして嫌悪が纏わりついてくる。

——アリシアはそんな目で私を見たりしなかった。

これは罰なのだ。ふと、私はそう悟った。何に対する罰なのかはともかくとして、人が踏み込んではいけない領域に踏み込んでしまったことへの罰なのだ。

命とは死ぬものだ。遅かれ早かれ、必ず死ぬ。それが世界の理であり、運命なのだ。

如何なる例外もそこには存在しない。否、あつてはならないのだ。それは決して歪めてはならないものだったのだ。

「プレシア…この子は…？」

「…フェイトよ」

その名前はすぐに思い浮かんだ。考えている時間などほとんどなかった。呼吸をするように、ごくごく自然にその名前が口に出てきた。プロジェクトF・A・T・Eの最初の一葉。これより相応しい名前

があるはずもなかった。

私はあの子が、フェイトが恐ろしかった。

アリシアとは違う。

そうわかつているはずなのに時折見せる何気ない表情や仕草があの子に重なる。

まるで、あの子が其処にいるかのような錯覚。

しかし、それは所詮、一瞬の幻なのだ。逃れようのない現実が私を苦しめる。

母親らしい態度を見せたことはなかった。娘として扱ったこともなかった。

苦しめ、傷つけ、罵倒し、尊厳の全てを踏みにじってきた。それでもあの子は私から離れようとしなかった。

いつそ、どこかに行ってしまうえば、と何度も思った。それでも、フェイトは私のそばにいた。

私が唯一の拠り所であるかのようなその瞳が煩わしく、それ以上に恐ろしく、不気味だった。

フェイトが生まれてから、私は病は急激に悪化した。

それまで張り詰めていた気が一気に抜けてしまった反動、期待を裏切れたショック、理由は幾つでも思い浮かんだが今更足掻くつもりはなかった。

——遠からず死ぬ運命なのだ。惜しむ命でもない

生きたい、という理由はもうない。全てを失った私に残されたのはこの時の庭園ぐらいだ。私が死ねば使い魔であるリニスも遠からず消滅し、ここも誰かの手に渡る。それだけのことだ。

そう考えて私は気付いた。

——私がいなくなればあの子は、フェイトはどうなってしまうのだろうか…

どうでもいい、と心のどこかで声が響く。それは紛れもない私の本音だ。

疎ましく、恐ろしくさえ思っているフェイトの未来に興味はない。しかし、頭をよぎったのは縋りつくように私を見つめるあの子の目だった。

——きっと、一人では生きていけないでしょうね…

単純に幼いから、というだけではなく、精神的な脆さがそう判断した理由だ。あの子には、おそらく、生きたいという欲求がない。己の意志というものがないのだ。仮にあったとしても私の言葉がすぐに変わってしまうあやふやで、頼りないものだ。

——あの子がどうなろうと私には関係ないのに…

それなのに、あの子の寂しげな、絡みつくような視線が離れない。
亡霊のようなその視線に、私は囚われたままだ。

『また、私を見捨てるの？』

あの子の、アリシアの声だった。

心臓を穿たれたような痛みと寒気。事故の時の後悔の記憶が一拳に押し寄せてきた。

——違う。見捨ててなんていないわ。あれは……本当に、事故だったのよ。

見捨ててなどいない。私がアリシアを見捨てるはずかない。そう声高に叫んでみても、現実は変わらない。アリシアはもういないのだ。私が殺したも同然なのだ。

——そう、ここであの子を見捨ててしまえば、あの時と同じままなのだ。だけど、私には…

たとえアリシアでなくとも、失敗作であろうとも、あの子には私しかいないのだ。あの子をそうさせてしまったのは私だ。そんな私があの子を見捨てるなど許されるはずがない。

あの子を道連れにするなどしていいはずがないのだ。

私の心は決まった

・*・*・*・

執務官の少年の頭上にあの子を見つけた。傷一つないデバイスはリニスの傑作、漆黒のバリアジャケットは凛々しく、白いマントがよく映えている。そして、なによりその真紅の瞳には今までなかった強い意志が宿っていた。それこそ、私があの子に与えてあげたかったものだ。

「貴方は邪魔よ。少し黙ってなさい」

紫色の魔力光が執務官に向かって飛んでいく。病で衰えたとはいえ、満身創痍の執務官には充分過ぎる威力がある。少年は盛大に吹っ飛んだ。

「母さん！」

フェイトがこちらに駆け寄ってくる。

「消えなさい。もう貴女に用はないわ」

しかし、あの子は退かない。その目に宿した意志はわずかたりとも揺るがない。

「貴女に言いたい事があって来ました」

フェイトは一呼吸置いて、私を見つめる。

「わたしは……。わたしはアリシア・テストロッサではありません。貴女が作った只の人形かもしれません。だけど、わたしはフェイト・テストロッサは貴女に育ててもらった貴女の娘です」

親らしいことは何もしてあげられなかった自覚はある。

あの日からは敢えて、そうしてきた。それがあの子の為になるのか自信はなかった。

迷いもした。躊躇いもした。後悔もした。それでも私はやめなかった。

それが、私にできるただ一つのことだったから。

それは決して褒められるやり方ではなかった。

フェイトを傷つけ、苦しめ、侮辱し、存在さえ否定した。

最低のことをしてきた自覚はある。許されることではない。

しかし、それでもよかった。

たとえ許されなくとも、非難されても、それがフェイトの未来に繋がるのなら、それでよかった。

そして、それは正しかったのだ。今までのような、縋りつくような目ではない。

私の言われるままに動く人形だったフェイトがフェイトの意志で私の前に立っている。

それだけで私にとって充分だった。

——これでもう、私がいなくても生きていけるわね

あとは、あの子の迷いを断ち切るだけだ。それが私の最後の役目だ、親としての。

「だから、何？今さら貴女を娘と思えと言っの？」

私にとってフェイトは娘ではない。

それでも私はフェイトの親なのだ。

フェイトを生み出したのは私なのだ。

「……貴女がそれを望むなら」

あの子はそう答え、続ける。

「それを望むなら、わたしは世界中の誰からもどんな出来事からも貴女を守る。わたしは貴女の娘だからじゃない。貴女がわたしの母さんだから」

フェイトが私に手を差し出す。本当ならばその手を握り、そして、抱きしめてあげたかった。しかし、それは私には許されないことだ。ここでその手をとれば今まで積み上げてきた全てが水の泡になってしまう。それだけはしてはいけない。

「くだらないわ」

伝えたいことはたくさんある。心に秘めた全てをこの場で打ち明けてしまいたい。しかし、その全てを飲み込んで、あの子の想いを私は『くだらない』の一言で容赦なく切り捨てた。

「え……？」

フェイトの表情が曇り、泣き出しそうになる。しかし、私はそれを

無視して魔法陣を展開する。あの子が必死になって集めてくれた九つのジュエルシードを暴走させるための魔法。

——こんな茶番に突き合わせしまつてごめんなさいね…でも、貴女はもう一人じゃない。私がいなくても生きていける。

全てを失った、そう思っていた。だけど、それは大きな間違いだった。

私にはフェイトがいた。どんなに傷つけられても、苦しめられても、私の呪縛から逃れ、フェイト自身の意志を持つようになってもお、あの子は私を母と呼んでくれた。

たった一人だけ。

だけど、かけがえのない一人。その一人に私は愛されていた。その一人を私は愛せたのだ。

あの子にどんな風に思われてもこの気持ちが伝わらずとも嘘だと思われても

私のそばから離れていったとしても

——私は、フェイトを、愛していた。

眼下に広がるのは虚数空間。一切の魔法が通じない次元の狭間。ジエルシードの暴走は時の庭園を崩壊させ、その全てを闇が飲み込んでいく。私も例外ではない。虚数空間に飲み込まれた者の末路を知る者はいない。魔導師にとってそこは未知の世界なのだ。しかし、恐れるものなど何もないのだ。

「……全てを取り戻す。過去も未来も、たった一つの幸福も」

私がいなくなつて、真実フェイトは私という過去の呪縛から解放たれる。

たとえ、傷ついても、苦しんでもあの子はもう、一人ではない。きっと、大丈夫だ。

「一緒にいきましょう、アリシア。今度はもう離れないように」

この子にも謝らなければならぬわね。私の犯した最初の間違い。それは、もう一人のアリシアを造ろうとしたこと、そのものなのだから。

——もう一度、やり直す？なんて愚かな考えなのだろうか。あのとき、アリシアは笑っていたのに……あんなに楽しそうに、笑っていたのに。

私は自嘲気味に笑った。アリシアにとっても、フェイトにとっても私は決していい母親ではなかった。そんな愚かな自分を私は笑った。足場が崩れ落ち、アリシアの入ったカプセルもろとも虚数空間へと堕ちていく。あの子が手を差し出すが、もうどんなに手を伸ばしても、届かない。

——さようなら、私のフェイト

——二人の娘の未来に幸多からんことを

『迷路』 Fin .

f r o m

奥華子『迷路』

『迷路』（後書き）

魔法少女リリカルなのはSSSS（略）、如何だったでしょうか？

やっぱり、月兔はマイナースキーのようですね。しかし、需要に左右されず、書きたい物語を書くことが私の心情ですゆえ、見捨てないで今後ともお付き合いよろしくお願いします。

で、例の如くちよつと解説。

プレシアってきつと不器用な人間なんだろうな、という月兔の脳内設定があるのでそれに基づいて話は展開しています。基本的に後悔録なんですけど。

プレシアがフェイトに辛く当たっていた理由である種の罪悪感のせいもあるんじゃないでしょうか？アリシアに優しくできなかったのに、フェイトに優しくしたらアリシアに顔が向けられない、みたいな。

プレシアはフェイトを嫌っていた以上に、自分自身を嫌っていたんじゃないでしょうか。アリシアを死なせてしまった自分が嫌で、フェイトに優しくできない自分が嫌で、そんな自分をどうしても好きになれなくて。そんなプレシアの心の内を表現してみたんですが、如何だったでしょうか？

なのはシリーズの中でもプレシアほど救いのなかったキャラは珍しいのではないでしょうか？実の娘を事故で失い、絶望のどん底の中で生きていく辛さ。十歳そこそこの執務官の言葉はもったもなことなんですけど、プレシアsideにしてみれば恵まれた人間が綺麗事を言っているだけにしか聞こえないでしょうね・・・

まあ、執務官も事故で父親を亡くしているんですけど。

選曲は今回も奥華子さんです。色々ある曲のなかでもこの『迷路』は特に好きなんです。一度は聞いてみることをオススメします。騙されたと思って是非。

とはいえ、上手く合わせられたのでしょうか・・・読者のみなさん、ぜひ感想をば。月兎はあなたの感想を心待ちにしています。よろしくお願いします。

今回はフェイトsideのお話を連作風味で書いてみたいと思いますので乞うご期待。ちなみに、選曲はまた奥華子さんの楽曲になる予定です。

ただいま執筆真っ最中なので楽しみに

で、この場を借りて新作予告です。

年明けくらいに新作を投稿しようかなって考えています。オリ主で

Strikerです。

アンチ管理局とまではいきませんが管理局のDarksideを描いていこうかなと。

題名は『魔法少女リリカルなのはStrikers Blade Heart（仮）』です。こちらもよろしく願います。

では、次回もよろしく願います。

どうも、月兎でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2576o/>

魔法少女リリカルなのはShort Song Stories

2011年10月7日02時27分発行